

## ＜前回＞宗教批判 1、フロイト

### (1) フロイト

#### 1. フロイトの宗教批判の二つの前提

①人間の類の本質の無限性

②類の本質の外化（＝疎外、投影）

2. 「宗教は動物に対する人間の本質的な区別に基づいている — 動物は宗教を持たない」
3. 人間の本質あるいは類（あるいはいわゆる人間性）：理性、意志、心情
4. 類としての理性そのもの（種あるいは類としての人類）の無限性
5. 人間は自らの活動を通して自己を自分自身から区別された客体として措定する（外化あるいは疎外）→「対象の意識は人間の自己意識であり」、「対象は人間のあらわな本質であり、人間の真実にして客観的な自我である」
6. 「宗教は無限者の意識である。したがって宗教は人間が自らの無限の本質についてもつ意識であり、かつそれ以外の何ものでも在り得ない」。「神の意識は人間の自己意識であり、神認識は人間の自己認識である」
7. 「神は人間の鏡である」、「神学の秘密は人間学である」
8. 宗教：人間の本質を人間の外に存在する超越的なもの（＝神）として措定→偶像崇拜  
「神を富ませるために、人間は貧しくならねばならない」、「神が主体的であればあるほど、人間はよりいっそう自分の主体性を疎外する」
9. 哲学の課題：このような神と人間の対立が類的本質としての人間と個人としての人間の対立であることを暴露することであり、人間から疎外された人間性を人間の側に取り戻すことなのである
10. ①フロイトによって批判された神  
人間の無限の類的本質が人間と対立するものとして人間の外に投影されたもの  
→人間は無限な自らの本体的人間性の実現を妨げられる、人間のエゴイスティックな幸福衝動の素朴な実体化  
最高存在あるいは最高価値として措定された神（形而上学的存在者としての神）
- ②人間の類の本質の無限性の根拠  
「個別的には人間の力は制限されているが、結合されると無限の力となる。個々の人の知は制限されているが、理性は制限されておらず、学も制限されていない。なぜなら、それは人類の共同行為だからである」  
→近代人の「信仰」（無限の進歩）＝楽観主義・ヒューマニズム
- ③現代の宗教的神学的思想は人間の疎外の克服、人間の本来的可能性の実現についてどのように考え、どのように答えているのか  
→「投影のメカニズム＝人間の本性」ならば、フィクション機能の積極的意味こそが問われるべきである（ユートピア精神の意義）
- ④フロイトの宗教批判 → マルクス的な無神論的な宗教批判  
→ キルケゴール的な有神論的な宗教批判

### (2) フロイトの宗教論

1. フロイトの近代主義：科学としての心理学  
心理現象の因果的見方・遡及的見方（アルケオロジー）  
意識は無意識と連続的に、力動的につながっている  
病・症状（結果） → 無意識の抑圧（原因）
2. 治療のためのモデル化、神経症 → 抑圧理論
3. エディプス・コンプレックスと性欲モデル
8. 神は投影である / 宗教は幻想である（還元主義的解釈学）  
・ 幼児期に形成された父親イメージの自然への投影  
・ 集団的な強迫神経症としての宗教
9. 近代人の宗教からの自立、啓蒙の勧め  
↓

宗教的に機能する心理学（カウンセリング）

しかし、カウンセリングは宗教の代わりとなり得るか？

## **8. 宗教批判 2 —マルクス・キルケゴール**

### **(1) マルクス**

- ①人間社会に宗教が生じたのは単なる偶然ではない。宗教は欲求の疎外形態における実現（否定的な媒体）であり、人間の現実生活の一契機なのである。
  - ・唯物史観：生産力と生産関係の矛盾の弁証法的展開
  - ・上部構造と下部構造
  - ・個人と共同体
- ②宗教批判と政治社会批判とは密接に関連
  - 「ドイツにとって宗教の批判は本質的にもう終わっている。そして、宗教の批判は、あらゆる批判の前提である。天上の批判は、こうして地上の批判にかわり、宗教の批判は法の批判に、神学の批判は政治の批判にかわる」（『ヘーゲル法哲学批判序説』）
  - ・フョイエルバッハの議論の歴史的実質化
- ③宗教は人間社会の歴史において必然的に生じたものであるが、その歴史的条件が変化するとき、必然的に終焉を迎えるはずである。
  - ・積極的批判と自動的消滅待望
  - ・宗教はアヘンである
- ④宗教を不可欠の契機として含まないような現実世界の構築
  - 共産主義社会：非疎外形態における欲求・類的本質の実現→これ自体がユートピアか？
  - 無階級社会
  - 自己止揚・自己否定の契機をマルクス主義は内部に組み込んでいるか？

### **<ヨハネ黙示論 2 1 章>**

22 わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが神殿だからである。23 この都には、それを照らす太陽も月も、必要ではない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。

#### 1. ジジェク：ラカン派マルクス主義。

「史的唯物論的分析」、「宗教が、もはや特定の文化的生活形態に完全に組み込まれたり、それと同一化したりするのではなく、自律性を獲得し、その結果、様々な文化にまたがる同じひとつの宗教として生き残ることができるような社会体制——これは、近代のありうべき定義のひとつである。」(8)

「このグローバル体制において、宗教画に担いする役割は二つある。治療的役割と批判的役割である」(9)

「問題は、近代という<理性>の時代において、宗教は社会を有機的にまとめるというこの機能をもはや果たすことができない、ということである。今日、宗教がこの力を失い、もはやそれを取り戻すことができないのは、科学者や哲学者のせいだけではない。「普通の」人々という大きな集団のせいでもある」(11)

「キリスト教の転覆力を秘めた核は唯物論アプローチによっても理解できる、ということではない。わたしのテーゼは、それよりもはるかに過激である。つまり、この核は、唯物論的アプローチによってしか理解できない——そして後者は前者によってしか理解できない——ということである。真の弁証法的唯物論者になるためには、キリスト教的な経験を経るべきなのだ。」(13)

↓

キリスト教思想とマルクス主義の新しい関係構築の可能性、宗教社会主義論の再開。

### **(2) キルケゴール**

**1：キルケゴールの思想的特徴**

## ①宗教批判者としてのキルケゴール(1813～1855)

真のキリスト教と近代市民社会において墮落したキリスト教

→バルト（啓示と宗教との区別）

## ②反ヘーゲル主義 → 実存主義の先駆者

真理：客観性としての真理／主体性としての真理

体系：論理学の体系は可能である（諸イデアの相互関係）／しかし、歴史的な現実存在（＝実存）に関わる事柄についての体系は、人間には不可能である

同時代性と同時性：信仰はキリストと信仰者とが同時性に立つことによって可能になる。主体的真理として、無限の情熱の対象として、決断的に関わること。

## ③仮名と実名の二種類の著作 → 思想の表現形式、レトリックに注目

仮名の意味：1. 小説あるいはフィクション性→著作自体に注意を集中（詩的機能）

2. 一人の思想家の思想が、複数の仮名へと分散する。思想の断片性

「私自身は、ヨハネス・クリマクスよりは高いところにいるが、アンティ・クリマクスよりは低い地点にいる」、『死に至る病』副題：教化と覚醒を目的とする（＝建德的）

ヨハネス・クリマクス『哲学的断片』『非学問的後書き』

アンチ・クリマクス『死に至る病』『キリスト教の修練』

**2：キルケゴールの宗教批判（現代批判と市民社会のキリスト教）**

## 2. 「コルサール事件」（1846年）、週刊新聞『コルサール』（ゴシップ暴露）

## 3. キルケゴールの現代批判（『文学評論』の第2章）

- ・革命の時代と分別の時代（反省の時代、情熱のない時代）

水平化と外面性 → 新聞などのマスコミと世論・公衆といったもの

- ・宗教的信仰：個々人の救いの問題、個人ひとりひとりの事柄

宗教者にとってきびしい試練、修養 → 「良き戦い」として人生（天路歷程）

- ・沈黙、無関心を装った教会 → 非人間的大衆化社会を批判し真のキリスト教を守るべき使命をもつ教会（戦闘の教会、ecclesia militans）という任務の放棄

**3：単独者の思想**

「キリスト教的な英雄的精神とは、人間がまったく彼自身であろうとあえてすること、ひとりの個体的な人間、この特定の個体的な人間であろうとあえてすることである、——かかる巨大な努力をひとりでなし、またかかる巨大な責任を一人で担いながら、神の前にただひとり立つことである」 → 単独者 → ルターの信仰

①人間論の伝統：人間を統合と捉える議論、デカルトにおける、心（思惟）と身体（延長）という二つの実体の合成としての人間。両極性における人間存在の分析。

②人間の自己：自己関係という構造を組み入れた関係的存在

自己反省、自己参照性、自己関係：「……「自己」に関する関係」に関する関係」……」 → 無限に多重化する存在者である（生成過程における自己）

③自己＝生成しつつ在る存在者、自己になりつつある存在者 → 本来的な自己になるという課題

④関係存在としての自己の存在根拠

1. 人間は自己自身の中にその存在根拠を有する → 自己組織化

始まりの問題（宇宙の始まりのその前）と無限遡及のパラドックス

2. 関係存在の措定者を自己ではない他者として考える立場

⑤人間＝自己関係的存在→自己になる課題→不安と絶望の可能性

**4：実存弁証法と真のキリスト者への道**

4. 「美的段階 → 倫理的段階 → 宗教性A → 宗教性B」：精神の発展プロセス

[美的段階]：美的なものが人生の原理あるいは目的になっている生き方

[倫理的段階]：倫理的なものが原理または目的とする生き方  
段階論か、類型・要素論か。理念的に再構成された関係論と段階論という仕方での説明。

「三類型」は「弁証法的発展段階でもある」(武藤、9)

「万人がキリスト者であるという途方もない錯覚が支配するいわゆる「キリスト教界」(Christenheit)において、「いかにして人はキリスト者となるか」を思索の焦点とする宗教的著者は、まず美的著作者として出発せざるを得ないのである」、「もとよりこれは、或る意味で、欺瞞であって、そこに匿名の意味も存するわけであるが、この欺瞞は、真理へ導こうとするためのものにほかならない。」(9)

5. 「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」(マタイ 26:41)。

[宗教性A]：「わたしは特定の宗教は信じないが、神や霊の存在は信じる」

6. 宗教性AとBとの関係(宗教性一般の立場からキリスト教へ)

7. [宗教性B]：同時性、あるいは絶対的逆説性

8. 市民社会において墮落したキリスト教(精神性から脱落)と異教(無精神性)

### 5：キルケゴールの問題性

9. キルケゴールとマルクス、ニーチェ

・キルケゴールとマルクスとを関係づける必要性。

・ニヒリズムの問題への取り組み。

「この世の相対的事物に対する深いニヒリズム」(武藤、6)、「イロニーを、分限の絶対的否定性として規定した」(57)

10. 個人と社会・共同体との関係、個人の主体性の強調→単なる抽象論、

大衆の蔑視→エリート主義あるいは単なる変わり者

「現実に対する保守的態度」(武藤、39)、「実存主義とラディカルな社会倫理の結合こそ、現代の課題であることを信ずるものである」(40)、「実存の現実化ないしは実存哲学と歴史哲学との結合という現代哲学の課題」(42)

### <参考文献>

1. レーヴィット 『ヘーゲルからニーチェへ』岩波書店。

2. 都留重人 『マルクス』講談社。

3. 津田雅夫 『マルクスの宗教批判』柏書房。

4. スラヴォイ・ジジェク『操り人形と小人 キリスト教の倒錯的な核』青土社。

5. キルケゴール『現代の批判』『不安の概念』『死に至る病』岩波文庫。

『哲学的断片』『哲学的断片へのむすびとしての非学問的あとがき』(『キルケゴール著作集』)白水社。『キルケゴール著作全集(原典訳記念版・全15巻)』創言社。

6. 武藤一雄 『キルケゴール』創文社。

7. 小川圭治 『キルケゴール』講談社。

8. ディーム 『キルケゴールの実存弁証法』創言社。

9. 川村永子 『キルケゴールの研究』近代文藝社。

10. マッキノン他『キルケゴール——新しい解釈の試み——』昭和堂。

11. 稲村秀一 『キルケゴールの人間学』番紅花舎。

12. エヴァンス、フェッター他『宗教と倫理 キルケゴールにおける実存の言語性』

ナカニシヤ出版。

13. 日本キルケゴール研究センター刊行、松木真一編

『キルケゴールとキリスト教神学の展望

<人間が壊れる>時代の中で』関西学院大学出版会。

14. キルケゴール協会：<http://kierkegaard.jp/>

15. 日本キルケゴール研究センター：<http://www.justmystage.com/home/kierkegaard/>